

協調活動を取り入れた 「学校図書館における調べ学習」の有効性を探る A Collaborative Exploration into the Effectiveness of “Investigative Learning in School Libraries”

浅野真紀子
Makiko Asano

中京大学大学院 情報科学研究科
Graduate School of Computer and Cognitive Science, Chukyo University
asano@vgc-cs.sist.chukyo-u.ac.jp

Abstract

This study reports on motivated learning through collaboration among teacher, students and librarian.

Keywords Collaborative learning, Investigative learning, A school library

1. 研究の目的と方法

学校教育を支援する新しい学校図書館像を用いた授業実践を考察するなかで、本研究は、具体的に次の2点を目的にした。

- (1) 調べ学習に図書館での協調活動を取り入れて、知識の定着度と学習意欲の向上を図ること
- (2) 学校図書館担当者が教科担当教員とチームを組んで授業をコーディネートすることで、知識の定着と学習意欲の向上を図ること
具体的な方略として、ジグソー法を用いた授業を立案し、実際に中学校での実践を通して、効果を検証した。

2. 実践方法

「調べ学習」に協調活動を導入することによって、(1)生徒の学習と、(2)チームによる教員の授業内容の向上を目的とした。この2つをそれぞれ観察・分析して、(1)と(2)が同時に起きることを実証する。これを繰り返すことでさまざまなテーマでの調べ学習に適用可能なデザイン原則を見出すことができるだろう。

学校図書館の利用は好適な環境(多くの資料と広い机があり、図書館資料を扱う専門家が常駐する)をもち、実地場所として選択すること

が望ましく、その存在は読書を基礎とした学習や表現力を養う場所でもある。

約4ヶ月間、中学1年生(2クラス計42名)をそれぞれ対照群(Aクラス17名)と実験群(Bクラス25名)に分けて、同じ教科(社会科・地理)を別々の教員が授業を行った。この2クラスは、もともと今回対照群としたAクラスの方がBクラスに比べて約20点テストの平均点が高い。今回の実践では、Bクラスに対して実験群は本研究のテーマである「協調型の調べ学習」を教科教員と学校司書とのチームティーチングで行い、その成績や、学習意欲がAクラスの成績や学習意欲に近づくことを狙いとしている。教員が最も期待したことは、友好的人間関係を作りながら、教科書だけにとらわれずに自ら調べる大切さを知り、学びの楽しさを知ることによって、生徒個人とクラス全体が成長することであった。教科としては、地理を扱った。これは、地理の学習によって世界に繋がっている自分に気づくことも期待したからである。

授業は、Aクラスを「従来型」とは、生徒一人ひとりが個別に、教員に与えられた教材を調べて提出する方法である。協調型は、生徒を5人ずつ組みにし、本やインターネットを使って、自分たちで調べる内容を決めるなど、調べる対象についても関心を持ちつつ学ぶ方法である。協調型では、ジグソー法を用い、生徒は調べた内容を互いに共有しながら、ポスターの口答発表を3回実施した。

課題は、「世界の国々を調べましょう」「私

たちの未来を考える」「さがしものを見つけ
て！」と3つ用意し、Bクラスのみ行った。A
クラスは地理の自由課題であった。

<実践データの収集>

どのような協調活動が起こっているのか教科
担当教員とともに観察しながら、ワークシート
や次の課題内容の調整を行った。教員は学習に
おける学習目標を設定し、授業に用いる資料を
探索・調達した。筆者は授業に用いる資料の紹
介、情報検索パソコン指導という学校司書の役
割のほか、学習目標を共有しながら、授業展
開を教員と相談し、授業中も生徒の学習指導を
行い、生徒に学びが定着するための方略を提案
し、生徒の発表時の評価表やアンケートも作成
した。他に、観察と発話データの取得によって、
本研究の成果を見ることにした。

3. 研究結果と今後の課題

Bクラスの生徒の成績をAクラスと比較した
ところ、同程度の成績を収めていた（出題内容
が同様の実力テストの平均点がAクラス70点、
Bクラス68点となる）。また学習意欲について
はBクラスの方が意欲を持つようになっていた
ことがわかった。また教員も、筆者が想定して
いた以上の満足を示し、教員自身としても授業
意欲が大いに高まったと言える。結果を質的に
まとめると、次のようになる。

<生徒における成果>

- ・ 協調活動は、多くの生徒に学びの楽しさと
学習意欲の向上をもたらす
- ・ 平均点と同時に最低点が上昇し、学力が向
上した
- ・ 学校図書館の利用は多くなった

<教員における成果>

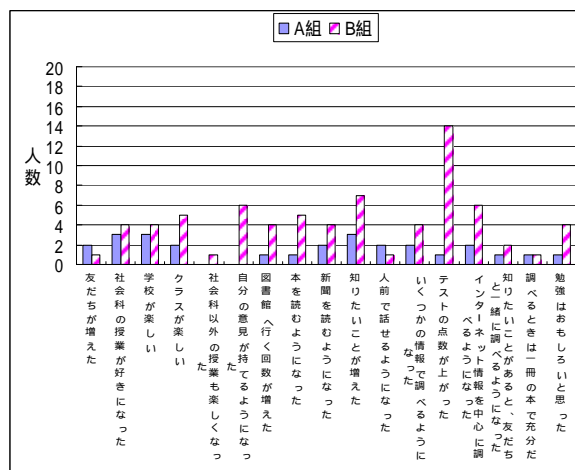
- ・ 今回は、教員と学校司書が協働したことによ
り、生徒の学習活動がより効果的になった
と言える

生徒、教員双方からのデータ取得を行い、教
員側からしか捉えられることがないような協調
活動の要因を、さらに研究という第三者的視点

から見る事ができたことは、学びの定着や深
化の見えない部分を考察できたのではないかと
考える。

協調活動を取り入れた「学校図書館における
調べ学習」は、下の図の反応に現れているよう
に、生徒に学習意欲を育成する効果が期待でき
るだけでなく、教員と筆者との協働が、生徒と
教員の学びの意欲を高め、充実した授業内容を
互いに期待させるなど新たな展開が生まれた。
生徒・教員に日常の授業、学校生活にも活力を
もたらす、生きる力となった。これを学校教育
に定着させるための方略が「協調的認知過程」
の導入であるといえる。相互作用（協働）によ
って、プラス効果は十分に期待できるが、社会
的要因である人間関係への配慮はグループ作り
に欠かすことができないだけでなく、授業の中
で生徒とのコミュニケーションによって、授業
計画の微調整ができる融通性や工夫も必要にな
る。今回の有効性がどの程度持続可能なものか、
知識統合となる学びの方略を実践研究のなかで
探っていきたい。

図 生徒アンケート：調べ学習後に変わった
と思うこと（比較）



参考文献

- [1]三宅なほみ, 白水始, (2003), "学習科学と
テクノロジー", 東京: 放送大学教育振興会
- [2]三宅なほみ, (2006), "学習科学; 協調的な
実践科学と理論構築との互惠関係をめざして",
人工知能学会誌, No.21 (1)